

けいせいこいびきやく

傾城恋飛脚

〔解説〕安永二年（一七七三）豊竹比吉座初演。近松門左衛門の「冥途の飛脚」を菅専助・若竹笛躬らが改作。梅川忠兵衛の哀れと、その父孫右衛門の情愛がしんみりと描かれた下の巻「新口村」が現在でもたびたび上演され、近松原作の「封印切」の後にこの段が上演される事もあります。歌舞伎の「恋飛脚大和往来」にも取り入れられ、浄瑠璃でもこの外題が使用される事もあります。

〔あらすじ〕飛御座亀屋の養子忠兵衛が恋仲の遊女梅川の身請の手付金として、恋敵の八右衛門の為替金を流用したことから、忠兵衛の許婚「おすは」は我が身を犠牲にして金を盗み出そうとしたり、梅川の父と兄は芝居を打ってまで金を作ろうと画策します。一方、亀屋の分家和平は八右衛門と組み、忠兵衛に罪を着せ更に毒殺しようとしてますが、逆に自分の罪がばれてしまいます。八右衛門は梅川の身請金を持って来ますが、梅川と忠兵衛の事情を聞いている親方は受け取ろうとしません。忠兵衛はたまりかねて持ち合わせていた三百両の封を切り梅川を身請します。喜ぶ梅川に、実はその金は公金であった事を打明け、覚悟を決めた二人は大和へと落ちて行きます。

〔新口村の段〕忠兵衛の故郷新口付に着いた二人は、道場帰りの人の中に親孫右衛門を見つけますが、世の義理から出ていくことができません。梅川は雪道で転んだ孫右衛門を介抱し、それとなく名乗ります。養子親への義理を立て、目隠しをして忠兵衛に会った孫右衛門は二人に金を与えて逃してやるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承下さい。

新口村の段

前に差しかゝる。落人のためかや今は冬枯れて、すゝき尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先、人目を包む頬かぶり、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、労はる身さへ雪風に、凍える手先懐に、暖められつ暖めつ、石原道を足引きの、大和はこゝぞ故郷の、新口村に着きにける。

「コレ忠兵衛さん。ほんにこゝは剣の中。かうしてゐても大事ないかへ」

「ア、いやいや。男気な忠三郎。頼んで今夜はここに泊り、死ぬるとも故郷の土、産みの母の墓所。一所に埋つまれそなたにも、嫁姑と引合はせ、未来の対面さしたい」

とおろ／＼涙梅川も、

「それは嬉しうござんせふ。さりながらわたしが父さん、母さんは京の六条数珠屋町。定めてこの間詮議に合ふてゐさんせふ。母さんは眩暈持ち、もしものことはあるまいかと、わが身の上より案じられ、今一度京の両親に、一目逢ふて死にたふござんす」

「オ、道理じやく。わしもそなたの親たちに、婿じやと言ふて逢ひましたし。恩のある養子親、妙閑様や許婚のおすはへも不埒の詫び。そなたの兄忠兵衛殿の、志も無にした断り。今一度しみじみ逢ひたい」と、人目なければ泣いじやくり、

「わたしもたと恩のある兄さんがなほ恋しい」と、互いに手を取り抱き合ひ、涙の霰はら／＼と、袖に余りて窓を打つ。

孫右衛門は老足の、休み／＼門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れて横ざまに、

どふと転べば『南無三』と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川慌て走り出で、抱き起しつ裾絞り、

「申し、どこも痛みは致しませぬかへ。お年寄の危ないこと、オ、マ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒も上げて上げませふ。マア、こちへ」

と手を引いて、うちへ伴ひ上り口、腰膝撫でて労はれば、孫右衛門は気の毒さ

「ア、戴きます。どなたか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のおやさしい。年寄りと思し召して、嫁子もならぬ御介抱、もふ、手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。辛ひ庭に藁は沢山、鼻緒はわしがすげます」

と懐搜して取り出す塵紙。

「ア、申し、こゝによい紙がござんす。こより捻つて

あげましょ」

と延紙引き裂くその手元、不思議そふに打守り

「こゝら辺りに見馴れぬ女中。マア、こなさんはどなたなれば、このやうに懇ろにして下さります」

と、顔つれづれと眺むれば、梅川いと胸つぼらしく、

「ハイわたしは、旅の者。わたしが舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生写し。他の人にする奉公とは、

さら、もつて存じませぬ。お年寄つた舅御の、臥し悩みの抱きかゝへ、孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひは飛び立つ、サア飛び立つやうにござりましょ。その紙とこの紙と替へてわたしが申し請け、連合ひの肌につけさせて、父御に似た親父様の形見にさせたふござんす」

と塵紙袖に押包む、涙にそれとは知られけり。詞の瑞に孫右衛門、『さてはそふか』と恩愛の、尽きぬ涙を押

し隠し、

「フウこなたの舅にこの親父が似たといふての孝行か。エ、嬉しうござる。ガ腹が立ちますはい。わしも年たけた倅めを、様子あつて久離切り、大坂へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、あげくに所を走つた噂。この大和は生国なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隠し目付、あるひは巡礼古手買ひ、節季候にまで身をやつし、この在所はモウく詮議最中。誰ゆるなれば、その傾城の嫁御ゆる。」

近頃愚痴なことなれど、世のたとへにも言ふとほり、盗みする子は憎ふなふて、縄かける人が恨めしいとはこのこと。久離切つた親子なれば、良からふが悪からふが、構はぬこととは思へども、大坂へ養子に行て、利発で器用で身をもつて、身代もよふ仕上げた、あのやうな子を勘当した親は大きなたはけ者と、指差しら

れ笑はれたら、その嬉しさはどふあらふ。今にもつい捜し出され、縄かゝつて引かるゝ時、孫右衛門は目水晶。よふ勘当したでかしたと、誉められるのがおりや悲しい、誉められるのが悲しうござるはい。ア、それを思へば一日も早ふ往生お救ひと、拝み願ふは今參る如来様御開山。コレ、マ仏に嘘がつかれふか」と、どふどひれ伏し悶え泣き。梅川も声を上げ、忠兵衛は障子より、手先を出し伏拝み、身をもみ歎くぞ道理なり。

涙の隙に巾着より、金一包取り出し、
「これは京の御本寺様へ、上げふと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない。たゞいまのお礼のため。これを路銀にちつとなど、遠い所へ行て下され」と、渡せば、梅川押しいたゞき

「お心づいたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を

立ち退いても、わたしが姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、

二十日あまりに四十両使ひ果して二歩残る。金ゆゑ大事の忠兵衛様、科人にしたもわたしから、さぞ憎からふお腹も立たふが、因果づく諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進せて下さんせ」

と、奥の障子を開るを引止め、

「ア、コレやくたいもない／＼。たつた今も云ふとほり、たとへ詞は交さいでも、顔見合はしたりや縄かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立たぬ。なんぼ義理が立てたいとて、親の手づからどふ縄がかけられふぞ、どふ縄がかけられふぞいの」

「御尤もでござります。そんなら顔を見ぬように」
と、傍にあり合ふ手拭取り、泣く／＼後に立廻り、

「慮外ながら」

と、めんない千鳥

「御不自由にはあらうが、かうさへすれば、傍にござつても構ひはあるまい」

「オ、忝なうござる。もの云はずと顔見ずと、手先へたと触つたら、それが本望逢ふた心。親子一世の暇乞ひ。ガコレ必ずこなたの連合ひに、もの云はして下さるな」

と悦ぶうちに忠兵衛は、嬉しさあまり駆出でて、親子手に手を取交ぜど、互に親ともわが子とも、云はず云はれぬ世の義理は、涙湧出る水上と、身も浮くばかりに泣きかこつ。折から聞こゆる多くの人音、二人を奥へと突きやり／＼

「コレ／＼女中。アノ物音は確かに捕手。この裏道の小川を渡り、藪を抜ければ御所街道。サ、早ふ／＼」

と気をもむ所へ、巡礼姿の八右衛門、利平も共に蚤取り眼。役人大勢打連れだち、

「この内が気塞いな」

とどか〜と込み入るところへ、組子一人駈け来り、

「ところは長谷の山続きに、梅川忠兵衛と名乗る者。

休みおつたを追つ取り巻き、からめ捕らんと致せども、

仲々手に合ひ申さず」

と、聞くより小頭、

「さてこそ〜、来たれ続け」

と引返せば、二人も共に飛んで行く。孫右衛門は飛立

つ嬉しさ、

「天の助けか忝ない」

と、裏道見やつて伸上がり、

「オ、そふじゃ〜その道じや。ソレその藪をくぐる

なら、切株で足突くな」

と届かぬ声も子を思ふ、平沙の善知鳥血の涙、長き親子の別れには、やすかたならで安き気も、涙々の浮世なり。